

寝屋川市役所蔵本「河内国交野郡寝屋長者鉢記」構想論

— 御伽草子「鉢かづき」との異同を中心として —

* 鈴木 弘道

(一)

御伽草子「鉢かづき」の諸本については、近年、松本隆信氏の調査が最も詳細をきわめているが、江戸時代に天野信景が、御伽草子「鉢かづき」を河内国寝屋村の長者伝説であると指摘したことについては、松本氏は「この伝説の内容が全く分らないので、これが『鉢かづきの草子』の原拠とは速断できない。」と述べられ、むしろ、逆に、御伽草子「鉢かづき」という文献の影響による伝説化として捉えておられるように思われる。しかしながら、この寝屋村の長者伝説の内容については、その後、日本古典文学全集「御伽草子集」所収「鉢かづき」の冒頭の頭注に、僅かながら、「北河内郡史蹟史話」に見える、きわめて簡単な要旨が掲げられたが、すでに昭和四十一年十一月刊行の「寝屋川市誌」の中に、その伝説を根幹として作出されたと想像される文献、寝屋川市役所蔵本「河内国交野郡寝屋長者鉢記」の全文が「寝屋長者鉢かづき」の題名で活字翻刻されていることには全然触れられていない。私は昨年、右の寝屋川市役所蔵本の形態を略述し、民間伝承としての寝屋長者伝説こそ御伽草子「鉢かづき」の原拠と見るべきこと、および、鉢かづき姫の変装趣向について、かなり大胆な試

論を公表したが、今回は市役所本の構想につき、御伽草子「鉢かづき」との異同を中心として考察しようと思う。

(二)

市役所本の第一冊目より第七冊目までは、それぞれ巻一より巻七に分けられている。巻一は、外題として「河内国交野郡寝屋長者鉢記巻」とあり、冒頭には、弘安二年のころに「寝屋村長者備中守藤原実高」が住んでいたこと、「今も寝屋村中ほどに蓮池あり、ここ門口という。長者所持の観音、地藏尊二体西蓮寺にあ」(八三八頁) ところが略記され、それより以下は、「寝屋長者鉢かづき記序」(八三八頁) という標題のもとに、次のごとき内容が記されている。

- (1) 弘安二年、河内国交野郡に住む備中守藤原実高の大長者ぶりは、天竺の月蓋長者に並び称せられるほどであった。
- (2) 実高の奥方は、津の国鳴海の里に住む若屋長者と呼ばれた声屋長太夫の息女で照見と言ひ、十六歳の時、実高に嫁いで来た。諸芸に秀でた美女であったが、子供の生まれなのが唯一の悩みであった。
- (3) 実高夫婦は子供が授かるように、初瀬寺観音に祈願している

と、ある夜、観音の、「一女を授けるが、十四歳になればこの鉄鉢をその娘の頭に着せよ」という夢告がある。

(4) 照見は、初瀬姫を出産する。姫は美しい賢女として育つ。

(5) 芦屋長者の家の内状は、複雑で、長大夫の甥にあたる鳴海太郎が悪事に耽ったため、長者は十代と続かなかつた。事情を聞いた実高夫婦も悲嘆に暮れ、照見は一時、気絶する。

卷二の外題は「交野郡寝屋長者鉢記 二」、内題は「芦屋長者欠所物の事 並ニ長大夫親子病死照見病発の事」(八四三頁)とある。その内容は次の通りである。なお、卷三以下については、外題・内題を示し、その次に、通し番号をもって、内容を簡条書きに整理しておく。

(6) 「津の国芦屋長者欠所品々左の通り」として財産の記録がある。

(7) 芦屋長者は死す。

(8) 照見が発病したので、初瀬姫は一心に介抱する。姫は、母照見の病氣全快祈願のため初瀬寺へ参詣したが、ある夜、照見の近く往生せんことを観音の夢告によって知り、甚だしく悲嘆する。

(9) 照見は臨終に際し、初瀬姫を呼んで、鉢を姫の頭に着せ、辞世の歌一首を詠じて往生する。

(10) 浅路という女性が実高の後妻として嫁いで来たが、性格・行状などはきわめて不良であった。

(11) 後妻浅路を中心とする、木津渡し場の奇怪な騒動が起る。

卷三の外題は「交野郡寝屋長者鉢記 三」、内題は「寝屋長者夫木津難渡の事 鉢かずき姫追い出され、かん難の事」(八五一頁)。

(12) 実高は、木津渡し場の騒動につき、地頭などに届けたが、その後、実高の家にしばしば怪異な事件が起る。

(13) 初瀬姫は、木津の事件や怪異な事件について朝夕嘆くが、浅路は実娘のお賢をかわいがって、初瀬姫をかたわ者として憎み嫌う。

(14) 初瀬姫は、亡き実母照見の三回忌に、法事・墓参などをして、わが身も早く往生したいと祈願する。

(15) 浅路は、初瀬姫を実高に讒言したため、姫は家から追い出される破目に陥る。

(16) 打上村四辻まで連れ出された後、一人になった初瀬姫は、八幡に至って淀川に投身するが、すぐに救助されて、淀の付近を再びあてもなく彷徨する。

(17) 山盜三位中将は、石清水八幡宮参詣の帰途、初瀬姫に出逢い、姫を伴なって帰館する。

卷四の外題は「河内交野郡寝屋長者鉢記 四」、内題は「首無し地藏尊由来の事 並ニ乳母おこんどの屋敷の記」(八五七頁)。

(18) 浅路は、弟作兵衛と手代権九郎に命じて、初瀬姫を殺させる。権九郎は、持っていた姫の首が不思議にも重くなったので、それを淀川に遺棄して東へ逃じする。後に、その首が、照見・初瀬姫の信仰していた地藏尊の首であったことがわかる。

(19) 浅路は、初瀬姫の死を信じて大いに喜ぶ。

(20) 実高に嫁ぐ以前の浅路は、きわめて不貞なる淫婦・奸婦であった。

(21) 初瀬姫の乳母おこんは、姫の家出した時は病臥中であつたため、姫を救出することもできなかったが、亡き照見の夢告により、姫の無事を知って安堵する。後年、おこんは長者となつた。

卷五の外題は「かたの郡ねや長者鉢記 五」、内題は「初瀬姫湯殿番と成り上るを 宰相殿には和歌の事」(八六三頁)。

- (22) 初瀬姫は、山蔭三位中将邸の湯殿役を仰せつかり、辛苦に堪えつつその仕事に励む。
- (23) 山蔭三位中将の四男、宰相は初瀬姫と相思相愛の間柄となり、姫は初めて自分の素姓を宰相に明かし、共々に歌を詠み交わして契を結ぶ。
- (24) 宰相の母君は、宰相が初瀬姫と夫婦の契を結んだことを快からず思い、宰相の兄嫁三人と初瀬姫との嫁くらべをして、二人の仲を割こうとたくらむ。
- 卷六の外題は「交野郡寝屋長者鉢記 六」、内題は「かつき鉢白ら消滅する事 並び嫁くらべ勝負の事」(八六九頁)。
- (25) 宰相と初瀬姫とは、思いあまって共に家を出て行こうとするが、その時、不思議にも姫の頭の鉢がぱたりと落ちる。
- (26) 鉢から立派な衣類や種々の宝物が出ると、鉢は紙のように南の空へ舞上って消えてしまう。
- (27) 嫁くらべが予定通り行われたが、初瀬姫の容姿はきわめて美しく、天女のごとくであった。
- (28) 初瀬姫は、また、管弦・和歌・書道などいずれの才能も兄嫁たちよりも優れていた。以上の嫁くらべの結果、山蔭三位中将は姫を正式に宰相の嫁として認め、宰相を家督相続させたいと思う。
- 卷七の外題は「交野郡寝屋長者鉢記 大尾」、内題は「宰相殿家督相続の事 並びに初瀬姫実父実高御対面の事 継母浅路成り行きのこと」(八七五頁)。ただし、この内題の第二・第三は次の内容から見て、順序が逆になっている。
- (29) 宰相は家督相続し、北の方となった初瀬姫と共に竹の御所に住む。

(30) 寝屋長者と呼ばれた実高は、その後、浅路の奸悪のために家運は傾いて、実高は修行者となり、浅路もまた路頭に迷う身となる。

(31) 初瀬姫は、亡母照見の追善供養をするため、長谷寺に参籠する。

(32) 実高は、かつて初瀬姫を家から追い出したことを後悔し、罪障消滅のために靈社仏閣を拝し、最後に、長谷寺その他大和の名所霊仏の参詣を志す。

(33) 実高は長谷寺で初瀬姫とめぐり合う。

(三)

右に整理した市役所本の内容の(1)より(33)までと、御伽草子「鉢かつき」の内容とを比較し、両者の主な異同を検討してみよう。

全集本は、市役所本の巻一「寝屋長者鉢かつき記序」以前にある冒頭文に相当する記事が全く見られず、最初からその「寝屋長者鉢かつき記序」に対する文が見えている。その(1)については、全集本と大要は同一であるが、全集本は市役所本の「弘安二年」「藤原実高」をそれぞれ単に「中昔」「さねたか」とし、市役所本にある「天竺の月蓋長者」のことは記されておらず、大長者ぶりもきわめて簡単にしか説明がない。(2)の「照見」については、僅かに全集本には「北の御方」が風流な生活を営むこと、および子供のないことを述べるのみで「照見」の名は記されていない。(3)における観音の夢告については、全集本には「いかなることによ、姫君一人まうけ給ひて、」(七六頁)とあるにすぎないが、御巫本には、長谷観音の申し子であることが明記されている。しかし、全集本では、姫に鉄鉢を着せる時の年齢が「十四歳」でなく「十三歳」である。(4)は、全集本と同一内容であるが、全集本

は、(4)のような固有名詞が用いられていない。(5)と巻二の(6)(7)(8)は、全集本には全く見られず、市役所本独特の記事である。(9)は全集本と同一内容であるが、全集本は、(4)と同じく固有名詞が用いられていない。(10)については、全集本に、実高の後妻が嫁いで来たことと、その継母が姫を憎むことを記すが、「浅路」の名はなく、また、その性格・行状の不良なことに関する具体的記事もない。そして、すぐ、(13)にある「実娘をかわいがり、姫をかたわ者として憎み嫌うこと」に触れる。したがって、(11)と巻三の(12)に該当する記事は見えない。なお、「実娘のお賢」の名は記されていない。(14)については、全集本も大体同様であるが、照見の「三回忌」という時期や「法事」のことは明記されない。(15)は、固有名詞を除くと、全集本も全く異同はない。(16)については、全集本も大差はないが、「打上村四辻」(八五八頁)や「打上坂」(八五八頁)は、全集本に普通名詞「四辻」(八一頁)を用い、「淀川」(八五八頁)は単に「大きな川」(八一頁)とあるにすぎない。(17)に至って、初めて山蔭三位中将が登場するが、姫との出逢いは、市役所本に、中将の石清水八幡宮参詣の帰途とあるに對し、全集本は「縁行道して、四方の梢をながめつつ、霞に遠里の、賤が蚊遣火、さしも草、そこひにくゆるうす煙、上の空にてたちなびき、おもしろかりける夕暮は、恋する人に見せばやと、ながめ出して立ち給ふ」(八三頁)時のこととなっている。巻四の(18)(19)(20)については、全集本に見えない。巻五の(21)の概要は、全集本においても大差はない。(21)の、姫が自分の素姓を明かす所は、全集本では、(23)に該当する箇所となり、しかも、その素姓の説明は市役所本の方が詳細である点、筋をやや異にする。巻六の(25)(26)(27)については(24)を除いて、全集本の内容とほとんど異同はない。ただ、(26)の、鉢が空へ飛び去ることは全集本に見られない。巻七の(28)については全集本も大差がないが、(28)については右

に述べたような異同がある。(30)(31)(32)は小異はあるが、大筋はほとんど異同がないと考えられる。

以上、検討した結果を表示すると、次のようになるであろう。○はほとんど異同がなく、○はやや異同があり、また、×は異同がある(全集本には記事がない)ことを、それぞれ示す。

全集本	市役所本																
	巻一				巻二			巻三			巻四						
○	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
×	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	

この表により、市役所本・全集本の内容を再検討すると、大体、市役所本巻一・巻二に見える、芦屋長者に関する詳細な記事、巻二に見える、姫に対する観音の夢告に関する記事、巻二・巻三における、後妻浅路を中心とする木津渡し場の騒動などの怪異な事件に関する記事、巻四に見える、浅路の行状に関連する首無し地蔵尊の由来、乳母おこんに関する記事、などが全集本に見られないことがわかる。ところで、市役所本に見える照見の辞世の歌に該当する歌が、全集本に、

さしも草深くぞ頼む観世音誓ひのままにいただかせぬ(七八頁)とあるが、「誓ひのままに」を説明し得る記事が見られず、僅かに御巫本に、姫君が長谷観音の申し子であると明記され、また、姫君が七歳になれば観音より賜わった箱と鉢とを姫君にかぶせよ、という夢告のあったことも記されているだけである。この点、市役所本の方が御

巫本と同じく、全集本よりもきわめて合理的であって、逆に、全集本には改悪の匂いが強く感じられる。もっとも、御巫本については、松本氏が、

観音への申子の場面は、当時の同類の物語にはきわめて類型の多い常套的な趣向であるから、この場面が無くとも、読者はさして理解に苦しまなかつたであろうとも考えられ、御巫本の形は、「さしもぐさ」の歌によって導き出された増補と見ることも可能であろう。^(二五)

と述べておられるが、それならば市役所本も御巫本と同じく一種の増補本と見るべきなのであろうか。しかし、私はすでに前掲拙稿に説いた通り、市役所本は寝屋長者伝説に加筆・潤色したものを祖本として作られた本であって、大筋においては、伝説の原型とあまり大差がないものと考えている。

また、先に触れたごとく、市役所本には、初瀬姫の家から追放され、捨てられる場所が「打上村四辻」(八五八頁)「打上坂」(八五八頁)となつていてのに対して、全集本には「ある野の中の四辻」(八一頁)と記すだけであるが、普通名詞としての「四辻」に姫を捨てる理由が明白でない。その「四辻」が、姫を路頭に迷わせるには最適の場所と考えられないでもないが、それならば、むしろ「ある野の中」だけに限る方がより効果的ではあるまいか。したがって、「四辻」は、固有有名詞としての地名「打上村四辻」であつてこそ写実的であり、この点において全集本は市役所本より改悪的と言えるように思われる。その他、市役所本に、山蔭三位中将の四男宰相が初瀬姫の美しい容姿を讃え、かつて嵐山に遊んだ時に出逢ったかわいらしい幼女と似ていることを語る場面があるが、全集には、宰相が御室の院へ花見に行った時、「貴賤群集して、門前に市をなすつれども、その時にも、この鉢かづ

きほどの人はなし、いかに思ふとも、この人を見捨てがたくや思はれける。」(八七・八八頁)とあり、嵐山における話が異なっている。しかし、市役所本では、宰相の話の直後に、初瀬姫が過去を述懐して、十三歳の時に母に添われて嵐山に行ったことを述べているから、嵐山における宰相の体験とよく調和を保っているわけであるが、全集本には、わざわざ「御室の院」が使用されているため、読者に対して、言わばきわめて唐突感を起さしめるようである。したがって、全集本においては、御室の院の一件は、やはり改悪と言えるのではないだろうか。

右のように、僅かな例ではあるが、全集本には、構想上の破綻と見なし得る箇所があるから、どうしても、全集本の原拠となった伝説が存在したであろうことを想像せしめる——それが寝屋長者伝説ではないだろうか——とともに、その改作はきわめて不合理に行われたと見ることができようであろう。したがって、市役所本にあって全集本にない記事は、本来、存在すべきものと考えられ、これを除外していない市役所本こそ伝説の原型を保持しているものと思われるのである。

(四)

構想とは直接関係はないが、参考までに、以下、詩歌の異同について述べておこう。

市役所本には、歌が全部で一九首、漢詩一編数えられるが、全集本には一六首の歌が見られる。今、両者同一と見なすべきものを対照すると、次の通りである。

①市役所本巻二

さしも草ふかくぞ頼む観世音誓いのまゝにいたただかせつづ
(八四九頁)

全集本

さしも草深くぞ頼む観世音誓ひのままにただかせぬる

(七八頁)

②市役所本巻三

野の末の道ふみわけていづくともさして行きなん身とは思はず (八五五頁)

全集本

野の末の道踏み分けていづくともさして行きなん身とは思はず (八一頁)

③市役所本巻三

河岸の柳の糸の一筋に思ひきる身を助け給へよ (八五五頁)

全集本

④市役所本巻三

川浪の底の藻くずとしづめかしなどふたたびは浮き上りけん (八五五頁)

全集本

⑤市役所本巻五

くるしきは折たく柴の夕煙浮身とともに立ちやきえまし (八六四頁)

全集本

苦しきは折り焚く柴の夕煙憂き身とともに立ちや消えまし (八五頁)

⑥市役所本巻五

松風の空ふきはろふよに出でてさやけき月をいつか詠めん

(八六四頁)

全集本

松風の空吹き払ふ世に出でてさやけき月をいつかながめん

(八六頁)

⑦市役所本巻五

人はいさ思ひやすらん玉かづら面かけにのみいとゞ絶へなん (八六六頁)

全集本

(該当歌なし)

⑧市役所本巻五

いつの間うつろふ色のつきぬらん君が宿には花ぞありけん (八六六頁)

全集本

(該当歌なし)

⑨市役所本巻五

野とならばうづらとなりて山ならば雲間を出て君と住みなん (八六六頁)

全集本

(該当歌なし)

⑩市役所本巻五

苦しきは折たく柴の夕煙恋しきかたへなどなびくらん (八六七頁)

全集本

苦しきは折り焚く柴の夕煙恋しき方へなどなびくらん (九二頁)

⑪市役所本巻五

君来るとつづのまくらや呉竹のなどふし多きちぎりなりけん

(八六七頁)

全集本

君来んと黄楊の枕や笛竹のなど節多き契りなるらん (九三

頁)

⑫市役所本巻五

幾千世をふし添ひて見んくれ竹のちぎりは絶えじつげのまく

らに (八六七頁)

全集本

幾千代と臥し添ひて見ん呉竹の契りは絶えじ黄楊の枕に

(九三頁)

⑬市役所本巻五

人まちてういの空のみ詠むればつゆけき袖に月ぞ宿れり

(八六七頁)

全集本

人待ちて上の空のみながむれば露けき袖に月ぞ宿れる (九

四頁)

⑭市役所本巻六

我思ふ心の内はわかかへる岩間の水にたぐへても見よ (八

六九頁)

全集本

君思ふ心のうちはわかかへる岩間の水にたぐへても見よ

(九七頁)

⑮市役所本巻六

よしさらば野辺の草ともなりもせて君を露ともともに消えな

ん (八六九頁)

全集本

よしさらば野辺の草ともなりもせて君を露ともともに消えな

ん (九八頁)

⑯市役所本巻六

春は花夏はたちはな秋は月いづれの露にをくものぞうき

(八七三頁)

全集本

春は花夏は橘秋は菊いづれの露に置くものぞ憂き (一〇五

頁)

⑰市役所本巻六

後いとも君のめぐみにさそわれて雲井に照らす月のさやけさ

(八七四頁)

全集本

(該当歌なし)

⑱市役所本巻六

後宴地白樹棲シム梢ニ 浴露無声聞ニ枝根一

今夜月明人倍進 不知秋思有ニ誰家一

全集本

(該当漢詩なし)

⑲市役所本巻七

いとゞしく道行くかたの水上に清き流れにうつる面かけ

(八七八頁)

全集本

(該当歌なし)

⑳市役所本巻七

頼みてもなお甲斐ありや観世音二世あんらくの誓いのままに
(八八〇頁)
全集本

頼みてもなほかひありや観世音二世安楽の誓ひ聞くにも
(一〇九頁)

市役所本に見える右の一九首の歌の在所を整理すると、

巻名	卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七
歌数	〇	一	三	〇	九	四	二

のごとくであって、歌が巻五に集中的に見られるのは、やはり、巻五が宰相と初瀬姫との恋愛を記す巻であるからで、内題に「宰相殿には和歌の事」とある通りである。

なお、全集本には、市役所本巻六に含まれている、⑭と⑮との間に、わが思ふ心のうちもわかかへる岩間の水を見るにつけても (九七頁)

また、同じく⑮と⑯との間に、

道の辺の萩の末葉の露ほども契りて知るぞわれもたまらん (九八頁)
の歌が入っている。

(五)

市役所本は、全集本などの御伽草子「鉢かづき」と比較して、構想上、大きな異同が見られ、また、寝屋地方に根ざした民間伝承が物語の背景となっている、すこぶる異色ある作品と言えるであろう。ただ、

芦屋長者や後妻浅路を中心とする事件や記録などは、やや微に入り細をうがちすぎたために、かえって物語の本筋から逸脱し、饒舌との訪りを蒙む可能性があるかも知れない。それにしても、かかる文献が「鉢かづき」を始めとする御伽草子研究者の目にもほとんど触れず、長年、ひそかに役場や市役所に眠っていたこともまた珍しく、さらに、これを「寝屋川市誌」に活字翻刻された寺前氏の御英断に対しては、遅ればせながら、ここに大きな拍手をお送り申し上げたいと思う。

注

- (一) 「御伽草子本文について(二)——鉢かづきの草子——」(『斯道文庫論集』第三輯、昭和三十九年三月)・「民間説話系の室町時代物語——「鉢かづき」「伊豆箱根の本地」他——」(『斯道文庫論集』第七輯、昭和四十三年)。
- (二) 「塩尻」巻之三十九。
- (三) 前掲「斯道文庫論集」第七輯所載論文。
- (四) 昭和四十九年九月刊。
- (五) 「北河内郡史蹟史話」の誤りか、引用の誤りか、は不明であるが、この要旨の内容の中に、初瀬姫が「山陰中納言の室となった」とあるのは、「山陰中納言の四男宰相の室となった」と訂正すべきである。
- (六) 七巻七冊本で、外題の表記は各冊により小異の見られるものがある。
- (七) 当時、「寝屋川市誌」編集委員であり、現在、同市教育委員会に勤務される郷土史家、寺前治一氏のお仕事によるとかいうことである。
- (八) 以下、「市役所本」と呼称する。
- (九) 「寝屋川市誌」の「寝屋長者鉢かづき」の「解説」には、「鉢かづき」は種々な形で出版され、題名も「寝屋長者鉢被記」「絵入はちかつき物語」「はちかつき物語」などあり、内容・筋に大きな差は

認められないが、ところどころに相違がある。写本として流布されたので、筆者がそれに加筆・潤色したことも考えられる。(八三七頁)と見えるが、私は、むしろ、寝屋長者伝説に加筆・潤色したものを祖本として完成されたのがこの市役所本と考えられるのではないかと思っている。

(一〇) 拙稿「御伽草子『鉢かづき』の変装趣向とその原拠」(『奈良大学紀要』第四号、昭和五十年十二月)。

(一一) 市役所本は、便宜上、前述の「寝屋川市誌」所載「寝屋長者鉢かづき」を使用する。

(一二) 卷二以下、すべて内題と考えて差支えない標題がある。前掲拙稿には、「内題もない」と記したが、今、訂正する。

(一三) 以下、日本古典文学全集「御伽草子集」所収「鉢かづき」を使用し、「全集本」と呼称する。

(一四) 89では、姫の素姓は自然に判明するという内容になっている。

(一五) 「注一」の「折道文庫論集」第七輯所載論文。

付記——寝屋川市役所本の再調査については、寺前氏をはじめ同市役所の関係職員各位に多大の御配慮を添うした。ここに特記して深謝申し上げる次第である。

A Study on the Plot of "Kawachi-no-kuni, Katanogōri,
Neya-no-chōja, Hachi-no-ki"

—Laying stress on the difference from Otogi-zōshi "Hachikazuki"—

Hiromichi SUZUKI

Summary

I am going to consider laying stress on the difference from Otogi-zōshi "Hachikazuki" about the plan of "Kawachi-no-kuni, Katanogōri, Neyano-chōja, Hachi-no-ki", one of the books which are kept in the Neyagawa city hall, which originates in the legend of Neya-no-chōja.

There are seven books in the books of Neyagawa city hall and they are also seven volumes. Vol. I has a title "Neya-no-chōja Hachikazuki jo (introduction)" and the contents extending about five sections are described. In all the volumes under Vol. 2, the themes of the parts are specified;

- Vol. 2, "Ashiya-no-chōja kakuru-tokoro-no-mono-no-koto, and Chōtayū oyako byōshi Terumi byōhatsu-no-koto."
- Vol. 3, "Neya-no-chōja. Otto Kizu nanjū-no-koto, Hachikazuki-hime oidasare kannan-no-koto."
- Vol. 4, "Kubi-nashi-jizōson yurai-no-koto, and menoto Okon-dono yashiki-no-ki."
- Vol. 5, "Hatsuse-hime yudonban to nari-sagaru o Saishō-dono ni wa waka-no-koto."
- Vol. 6, "Kazukishi hachi onozukara shōmetsu suru koto and yome kurabe shōretsu-no-koto."
- Vol. 7, "Saishō-dono katoku sōzoku-no-koto and Hatsuse-hime jippu Sanetaka gotaimen-no-koto and mama-haha Asaji nariyuki-no-koto."

The above all volumes show the each content.

These contents can be divided into about thirty-three sections, but when we compare them with the contents of Otogi-zōshi "Hachikazuki", the nine sections have almost no difference, the fourteen sections of them have a little difference, and the ten sections have a great difference. And the sections which have difference can be seen mainly in the events and the records laying stress on Ashiya-no-chōja and the second wife, Asaji, and it seems that they rather deviate from the main line of the tale. The valuable literature like this is the one that the investigators of "Hachikazuki" should never fail to read at any rate.